

# 国東半島の鬼会面\*

―形態による分類(1)―

衛藤賢史

はじめに

国東半島は、古来宇佐八幡宮と密接な関係を保ちつつ、俗に六郷満山<sup>①</sup>と称し、天台宗系の寺院を中心に発達した仏教文化圏である。それは国東の風土に根を下ろし、その風俗・習慣・民間信仰と習合しつつ、特異な宗教の様式を発達させた。それらの解明にたいして諸先人の多くの研究、論文によって知ることができる。

六郷満山仏教と密接に関連し、他方で国東地方の民俗芸能とも深い関係をもつ「仮面」に関しては、未調査が多く全容を把握することができない。「仮面」は、半島の各市町村誌、県の調査書などに記載され、判明しているものだけを拾ってみても、約一二〇面を数え、記載もれ、未調査のものを含めると一五〇面を優に超えるのではないかと思われる。又、その種類も鬼会面、神楽面、神面、陳道面、菩薩面、能面など多種にわたっている。

国東半島各地に存在している各種「仮面」は、数、種類からみて、豊富な内容を持ち、これら、宗教行事を含め、製作から使用までの行

程などを調査できるとすれば、六郷満山文化の一面を十分に検討することになる。

本稿は、国東半島に散在する多くの仮面のうちから、現在、西満山の天念寺、東満山の岩戸寺、成仏寺などで毎年行なわれている「修正鬼会」行事で使用される「鬼会面」について、形態分類を中心に考察をすすめたいと考えている。

## (一) 鬼会行事と鬼会面

本題にはいる前に、この鬼会面を使用する「修正鬼会」とは、どんな内容をもつ行事かを知る必要がある。その概要から述べ、鬼会面についての問題にふれてゆくことにしたい。

修正鬼会とは、通称「へおにお」とか「へおによ」とよぶ。

もともと国東半島の六郷満山、天台宗系の寺院が「カ寺一院坊」とり行なう行事なのである。これは、新年初頭に国家安穩、厄難消除を祈念することを目的とした法要のことで「鬼走り行事」と「火祭行事」

が習合され、それが法会ほっかいの中心となるもので、他地方では類例少ない法会であつて、六郷満山独特の行事のように思われる。

この鬼会おにかい（以下、修正鬼会を「鬼会」という）が、いつ頃にその起源をもつのか、詳細は不明であるが、伝説によれば、六郷満山開基と伝える仁聞菩薩が、養老年間（七一七〜七二八）国家安泰、五穀豊穰、万民快樂を祈願し、鬼会式おにかいしき六巻を下賜、六郷二十八カ寺の天台僧が、これを拝受し、日本六十余州の神仏を勧請して大法要を営んだのが、この鬼会の初まりと伝えている。

又、中世以降、この鬼会が、どのような形式でとり行なわれていたかも不明な点が多いが、江戸期において盛んに行事を行なつていたことは、今回の調査で収集した十四カ寺七〇面のうち、持物銘を含めて年代銘を有する二一銘中、十七銘が江戸期の銘を有することからも伺える（表二参照）。

しかし、江戸期に盛んであつたと思われる鬼会も、明治期にはいると一カ寺もしくは一院坊でとり行なうことが困難になつてくる。この主たる原因は、鬼会が七日七夜にわたる法要のうえに、檀家までを含む多数の人々を動員するため、莫大な財源を伴うので、例えば藩主などの公式の援助を失つた明治期以降は、一カ寺のみの財源ではとうてい維持出来なくなつたためである。そこで、六郷満山の寺院を東組（これを更に小組にして両子寺組と文殊仙寺組にわけ）、中組、西組にわけ、鬼会の行事の日次が違ふところから、組内の寺院が相互に加勢しあうという方法をとつたようであるが、しだいに行事を中止する寺院が増え、読経だけの法要のみとなり、現在では、西組と中組が加勢して毎年行なう天念寺と、東組が加勢する成仏寺（奇数年）、岩戸寺（偶数年）の三カ寺のみが鬼会の行事を行なつてゐるのが現状である。

この鬼会の行事は、西組（中組を含む）と東組では内容に若干の相違があるが、基本的には同じであるので、本稿では、成仏寺で行なわれる行事内容の概要を以下に述べる。

成仏寺の鬼会は、旧正月五日に行なわれる。手伝いをする檀家の人々のなかで役付やくづきの人は、一週間前から寺で起居して精進潔斎の生活をし、行事の無事遂行を祈願する。

当日、鬼会の行事は「差定さじやう（さてい）」（行法の順序と役僧名を記したものに）従つて進行する。成仏寺の差定は二十四順序（岩戸寺、天念寺は二十二順序）あり、大別すると、読経を主とするものと、道具をもち所作をするものと、鬼の仮面をつけて作法するものの三部で構成されている。つまり、差定の一の「伽陀かだ（かだ）」から十五の「錫杖しゃくじょう（しゃくじょう）」までが読経であり、十六の「米華まいけ（まいけ）」から十九の「四方固しほうがため（しほうがため）」までが所作事、二〇の「鈴鬼すずおに（すずおに）」から二四の「鬼後咒きごじゆ（きごじゆ）」までが鬼の仮面をつけての作法となる。

読経は、昼すぎから本堂で始められ、夕闇がせまると、檀家の役付やくづきの一つであるテイレシテイレシ（松明入れ衆）が水垢離みづかじ（コーリトリという）をとり心身を浄め、本堂に戻り参加した僧侶と「盃さかずきの儀ぎ」を行う。次いで塩水を一般参加者にふりかけて浄めをする。「シオマツリ」の後、勇壮な法螺貝の音とともに、テイレシは一斉に本堂を飛び出し、用意された大松明おほまつあき（オオダイ）に火をつける。その間、本堂では、オニバヤシ・法螺貝の吹鳴が続けられ、院主いんしゆ（主催寺院の僧侶）以下の僧侶が九字を切つて般若心経を誦し安全を祈る。テイレシは、火をつけた大松明をもって「馬場」とよぶ松明に火をつける場所から山門まで戻ると、次々に、その大松明を振り回し、又馬場まで引き返すと順次に火を消していく。「タイアゲ」を行なう。これが終了すると、院主以下の僧侶は、再び山門から本堂へ戻り、差定にしたがつて行事をつづける。昼すぎから始めた読経の差定が終わると、香水棒こうすいぼう（こうすいぼう）とよぶ、テラガシワの木を四段に薄く削り花型にした棒などをつかつての所作事や、二名の僧侶による右手に刀、左手に鈴をもつての所作事の差定につづいて、鬼の仮面をつけての差定にうつる。

まず、最初は、鈴鬼の登場となる。二名の僧侶が鈴鬼の面をつけ、花模様 の 広口大袖の 上衣と、奴袴を着衣して、左手に五色の幣、右手に鈴をもって演舞する。鈴鬼には、男面と女面とがあり、仏の慈悲を具現したものと いわれ、鬼招きを勤める。この鈴鬼の鬼招きにより、次に、三名の僧侶が扮した災払鬼(さいはらいおに)、荒鬼(あらおに)、鎮鬼(しずめおに)——西組の天念寺の場合は災払鬼、荒鬼の二鬼——の三鬼が、麻布の絆天と股引を着衣し、白足袋・草履をはき、胴・腕・脚のそれぞれ十二カ所(閏年には十三カ所)を白い藤かずらの織維で縛り、背中に鈴をつけ、それぞれの名称の仮面(総称して荒鬼面という)を頭にのせた恰好で「テイレイシ」に背負われて登場し、「鬼走り」とよばれる秘法を行なう。三鬼とも持物を持ち、一番の災払鬼は斧、二番の荒鬼は不動刀、三番の鎮鬼は木槌を握り、片方の手に松明をもって堂内に盛大に火の粉をちらしながら踊り狂ったのち、「カイシヤク(八名のテイレイシが介錯として三鬼につく)」を従えて成仏寺の檀家の家を訪ねて歩く(西組では、二鬼は山門から出られない)。

三鬼が本堂に戻ってくると、再び楽奏がはじまり、暴れる三鬼に院主が鬼鎮めの餅をくわえさせると三鬼はともに鎮まる。それから、愛染堂に連れていき、鬼のイマシメ(藤かずら)を切りほどこくことによつて、この行事は終了する。

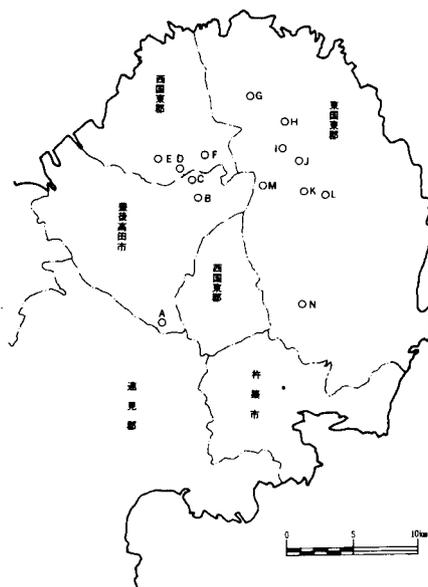
(二) 鬼会面を所蔵する寺院の沿革と所有面数

前章で述べたように、現在なお鬼会を行なっているのは、わずか三カ寺のみであるが、かつて鬼会を行なっていた寺院のほとんどは、未確認ながら鬼会面を所蔵しているものと思われる。

本報告では、時間的制約から概略的ながら確認し得た十四カ寺の簡単な沿革と、所蔵する鬼会面に関する若干の所見を述べたい。

なお、寺院のうえにつけたアルファベットは、表一の「鬼会面所蔵

寺院一覧表」によるものであり、沿革の記載順も表一のアルファベット順に従った。又、所在地については挿図1を参照されたい。



挿図1 鬼会所蔵寺院所在地

表一 (鬼会面所蔵寺院一覧表)

A 胎藏寺		B 長安寺		C 天念寺		D 無動寺		E 応曆寺		F 弥靱寺		G 千灯寺		H 岩戸寺		I 文殊仙寺		J 成仏寺	
災払鬼	A-1	災払鬼	B-1	災払鬼	B-1	荒鬼	D-1	災払鬼	E-1	災払鬼	F-1	荒鬼	G-1	災払鬼	H-1	災払鬼	I-1	災払鬼	J-1
荒鬼	A-2	荒鬼	B-2	鈴鬼(男)	B-3	荒鬼	D-2	荒鬼	E-2	荒鬼	F-2	荒鬼	G-2	鈴鬼(男)	H-2	荒鬼	I-2	鈴鬼(男)	I-3
鈴鬼(男)	A-3	鈴鬼(男)	B-3	鈴鬼(女)	B-4	鈴鬼(男)	D-3	古面	E-3	鈴鬼(男)	F-3	鈴鬼(女)	F-4	鈴鬼(女)	H-3	鈴鬼(女)	H-4	鈴鬼(女)	I-4
鈴鬼(女)	A-4	鈴鬼(女)	B-4	鈴鬼(女)	B-5	鈴鬼(女)	D-4	鈴鬼(女)	E-4	鈴鬼(女)	F-4	鈴鬼(女)	F-5	鈴鬼(女)	H-4	鈴鬼(女)	H-5	鈴鬼(女)	I-5



当寺の保有仮面は、荒鬼面(D-1)、荒鬼面(D-2)、荒鬼古面(D-3)の三面である。

#### E 応曆寺<sup>12)</sup>

西国東郡真玉町大字大岩屋にあり、養老二年(七二八)仁聞菩薩の開基と伝えられる。

山門派に属し、六郷満山中山本寺の一つである。江戸初期には、一時的に衰微したが、天禄八年(一六九五)僧澄慶によって中興された。本尊は、不動明王である。寺伝によると、創建当時の本尊は、千手観音菩薩であったという。

当寺の保有仮面は、災払鬼面(E-1)、荒鬼面(E-2)、鈴鬼男面(E-3)、鈴鬼女面(E-4)の四面である。

#### F 弥勒寺<sup>13)</sup>

西国東郡真玉町大字下城前にあつて、現在は無住である。この寺も仁聞菩薩の開基と伝えられる。

江戸期の天明年中(一七八一〜一七八九)には、応曆寺の支配末寺であつたが、現在では、その管理は下城前三土居の信者によつてなされている。

当寺の保有仮面は、現在真玉町大字城前、河野武則氏が、すべて管理しており、災払鬼面(F-1)、荒鬼面(F-2)、鈴鬼男面(F-3)、鈴鬼女面(F-4)の四面である。

#### G 千燈(灯)寺<sup>14)</sup>

東国東郡国見町大字千燈五五八に所在し、山号を補陀落山と号し、養老二年(七二八)仁聞菩薩の開基と伝えられる。

かつて仁聞が、敵国降伏の祈願を伊美の五智屈に登り修したところ、海竜天が一千の御燈を捧げたので「千燈」の寺号を称することにな

つたと云われる。以来この寺門は榮えて、寺領千石および末寺十六院を有し、皇室、武門の帰依も厚かつたという。その後、天正年中(一五七三〜一五九二)大友氏の弾圧に遇い、寺領は悉く没収され、一時廢寺寸前まで追い込まれたが、天正十五年(一五八八)再興され、再び榮えたという。本尊は、千手観音菩薩であり、寺宝として鎌倉期の作と伝えられる弥陀来迎石仏が、県指定の重要文化財になっている。

当寺の保有仮面は、荒鬼面(G-1)、荒鬼面(G-2)、鈴鬼男面(G-3)、鈴鬼女面(G-4)の四面である。

#### H 岩戸寺<sup>15)</sup>

東国東郡国東町大字岩戸寺にあり、寺号を石立山と号する。養老三

年(七一九)仁聞菩薩の開基と伝えられる。本尊は、薬師如来である。寺伝では、奈良時代初期、仁聞菩薩の作と伝えられるが藤原期の作と思われる。東満山では、現在でも鬼会行事を行なっている寺院であり、偶数年に行なっている。

当寺の保有仮面は、災払鬼面(H-1)、鎮鬼面(H-2)、鈴鬼男面(H-3)、鈴鬼女面(H-4)の四面である。

#### I 文殊仙寺<sup>16)</sup>

東国東郡国東町大字大恩寺二四三一にあり、寺号を峨眉山と号し、大化四年(六四八)役小角の開基と伝えられる。

本尊は、「知恵授けの神」と称し、文殊師利菩薩を安置する。寺宝として、応永四年(一三九七)の銘をもつ大梵鐘が、県指定の重要文化財になっている。境内は、昭和三十一年国立公園に編入された。

当寺の保有仮面は、災払鬼面(I-1)、荒鬼面(I-2)、鎮鬼面(I-3)、鈴鬼男面(I-4)、鈴鬼女面(I-5)である。

## J 成仏寺<sup>17)</sup>

東国東郡国東町成仏にあり、養老二年(七一八)の開基と伝えられ、開山当時は妙見山浄土院と称した。

本尊は、不動明王であり、参道両側の仁王像は天保二年(一八三二)の銘をもつ。東満山では、現在も鬼会行事を行なっている寺院であり、奇数年に行なっている。

当寺の保有仮面は、災払鬼面(J-1)、荒鬼面(J-2)、鎮鬼面(J-3)、鈴鬼男面(J-4)、鈴鬼女面(J-5)である。

## K 神宮寺<sup>18)</sup>

東国東郡国東町横手にあり、養老二年(七一八)仁聞菩薩の開基と伝えられる。

本尊は、不動明王である。寺宝としては、縣仏九面があり、うち四面は県指定の重要文化財になっている。又、鬼会の行事中、火災をおこし焼けた、八体の焼仏が安置されている。

当寺の保有仮面は、災払鬼面(K-1)、荒鬼面(K-2)、鎮鬼面(K-3)、鈴鬼男面(K-4)、鈴鬼女面(K-5)である。

## L 行入寺<sup>19)</sup>

東国東郡国東町行入にあり、養老二年(七一八)仁聞菩薩の開基と伝えられる。

本尊は、不動明王であり、昭和四十四年、県指定の重要文化財になっている。

当寺の保有仮面は、災払鬼面(L-1)、荒鬼面(L-2)、鎮鬼面(L-3)、災払鬼古面(L-4)、荒鬼古面(L-5)、鎮鬼古面(L-6)、鈴鬼男面(L-7)、鈴鬼女面(L-8)である。

## M 両子寺<sup>20)</sup>

東国東郡安岐町両子一五四八にあり、養老二年(七一八)仁聞菩薩の開基と伝えられる。

延暦寺派に属し、六郷満山中山本寺の一つであり、寛文三年(一六六三)六郷満山の総持院となり、以降満山の二八カ寺を統括していたことがある。

本尊は、千手観音・不動明王である。神仏混合の寺としても名高く、護国殿本殿に両子大権現と千手観音を合祀している。子授けの霊地としても知られる。

当寺の保有仮面は、荒鬼面(M-1・2・3・4・5・6)、鈴鬼男面(M-7)、鈴鬼女面(M-8)<sup>(図11)</sup>である。

## N 瑠璃光寺<sup>21)</sup>

東国東郡安岐町大字糸永一三三九にあり、養老元年(七一七)仁聞菩薩の開基と伝えられる。

本尊は、薬師如来である。

当寺の保有仮面は、災払鬼面(N-1)、荒鬼面(N-2)、鎮鬼面(N-3)、荒鬼古面(N-4・5)、鈴鬼男面(N-6)、鈴鬼女面(N-7)、蘭陵王面の八面である。

### (三) 鬼会面の形態による分類と銘・測定値について

鬼会面は、大別すると二つに分けられる。一つは、鈴鬼面であり、いま一つは、荒鬼面である。

一章で述べたように、鬼会の法要で差定に従って、最初に登場するのは一对の鈴鬼であり、この鈴鬼の鬼招きの演舞によって荒鬼(西満山では二荒鬼、東満山では三荒鬼)が登場して踊り狂う。このように、鈴鬼と荒鬼では、役割が全然違うので、同じ鬼会面でも面の形が当然

違ってくる。

鈴鬼は、仏の慈悲を現わしたものと云われる。面の形は、各寺院とも違うが、人間の男女の顔に似せた面（男面、女面という）であり、小面で、直接に顔にあてる。

荒鬼は、不動明王、愛染明王の化身と云われ、西満山の場合、災払鬼が不動明王で、面の彩色を赤色に染り（赤面ともいう）、荒鬼が愛染明王の化身で、面の彩色を黒色に染るが（黒面ともいう）、東満山の場合、災払鬼と荒鬼の他に鎮鬼が加わるので、彩色から鬼を判別できず、又、どの鬼が不動明王、愛染明王を指すのか、はっきりしない。面の形は、両満山とも、大形の異形の面であり、頭にのせるように工夫している。

形態による分類では、まず、この面の形から始めるのが妥当かと思われたが、その方法に、まだ一考の余地があると思われるので、今回は割愛し、鈴鬼面、荒鬼面の全てにわたって、耳・眼・口・牙・角のそれぞれを表二の分類結果に従って以下述べていく。

## (1) 眼 部

眼部の形態は、杏仁形・丸形・その他、の三類に分けた。

三類のうちでは、圧倒的に丸形の眼が多く、七〇面中、実に五五面を数える。このうち、荒鬼面が四〇作例、鈴鬼面が十五作例である。

この作例のうちで胎蔵寺の災払鬼面（A-1）と荒鬼面（A-2）のみが、眼のまわりを銅板で張っている。

杏仁形は、十三作例あり、このうち、荒鬼面が二作例、鈴鬼面が十一作例である。荒鬼面の作例は、瑠璃光寺の荒鬼古面（N-4）（N-5）であり、荒鬼面のうちでは特異な作例といえる。鈴鬼面では、千灯寺の鈴鬼女面（G-4）が丸形に近いが、面の裏側からみると、杏仁形の彫り込みをしているのが特徴である。

その他は、二作例であり、ともに荒鬼面で、岩戸寺の鎮鬼面（H-2）と文殊仙寺の鎮鬼面（I-3）である。この二作例は、眼の位置に直接彫り込まず、やや下部の方に三ヶ月形に彫っている。文殊仙寺の鎮鬼面（I-3）の場合、セットになっている災払鬼面（I-1）、荒鬼面（I-2）は丸形であるが、（I-1）は、やや上方を見るような彫りかたになっており、（I-2）は、正面を見るような彫りかたになっているので、（I-3）は、下方を見る彫りかたとして、このような作例になったのではないかと思われる。

## (2) 耳 部

耳部の形態は、紐結形・貼付形・彫込形・耳無型・不明、の五類に分けた。

紐結形は、二一作例であり、すべて荒鬼面である。このうち、現在何らかの形で耳を残している面は、十一作例であり、両子寺の荒鬼面（M-6）を除いて、耳の形は、靴べら状の簡単な形状である。

貼付形は、七作例であり、このうち、長安寺の災払鬼面（B-1）、荒鬼面（B-2）と天念寺の災払鬼面（C-1）、荒鬼面（C-2）は、大輪の花びらを思わせるような形状をなす。瑠璃光寺の災払鬼面（N-1）、荒鬼面（N-2）、鎮鬼面（N-3）は、人間の耳に似た形状である。

彫込形は、五作例であり、そのうち、荒鬼面が一作例のみ、鈴鬼面が四作例である。荒鬼面は、両子寺の荒鬼面（M-4）であり、他に類例をみない特異な作例である。鈴鬼面は、胎蔵寺の鈴鬼男面（A-3）、鈴鬼女面（A-4）と行入寺の鈴鬼男面（L-7）、鈴鬼女面（L-8）で、この作例も、今回調査した鈴鬼二六面中、わずかに四面であり、特異な作例といえる。

耳無形は、三一作例であり、そのうち、荒鬼面が九作例、鈴鬼面が

二二作例である。荒鬼面は、成仏寺(J)、神宮寺(K)、行入寺(L)の東満山の寺院の所蔵する三面セットの荒鬼面であり、西満山の寺院の所蔵する荒鬼面では、この作例をみない。

### (3) 角 部

角部の形態は、二本角形・一本角形・二又角形・無角形・不明、の五類に分けた。

二本角形は、七作例であり、この面を所蔵する寺院は、行入寺(L)、両子寺(M)、瑠璃光寺(K)で、すべて東満山の寺院である。

一本角形は、六作例であり、東満山では、瑠璃光寺の災払鬼面(N-1)に一作例をみるのみである。

二又角形は、十作例であり、ほとんど正面にむかって二又に分かれているが、無動寺の災払鬼古面(D-3)のみが、正面からみて横に二又が分かれている。

無角形は、四〇作例であり、そのうち、荒鬼面が十四作例、鈴鬼面が二六作例である。

荒鬼面を所蔵する寺院のうち、荒鬼面のセット全部が無角形であるのは、長安寺(B)、天念寺(C)、成仏寺(J)の三寺である。

鈴鬼は、形態上、当然角を有しないので、今回調査した二六面全部が無角形である。

### (4) 口 部

口部の形態は、阿形・吽形・不明の三類に分けた。

阿形は、四〇作例であり、そのうち、荒鬼面が二〇作例、鈴鬼面が二〇作例である。

吽形は、二八作例であり、そのうち、荒鬼面が二三作例、鈴鬼面が

六作例である。

鈴鬼面は、セットになつてゐる男面、女面が阿形と吽形に分かれる形状はなく、すべて、両面とも阿形か吽形に統一されている。なお、岩戸寺の鈴鬼男面(H-3)、文殊仙寺の鈴鬼男面(I-4)、神宮寺の鈴鬼男面(K-4)は、ヒョットコ形の口をしており、特異な作例といえる。

### (5) 牙 部

牙部の形態は、上下牙出形・上牙出形・下牙出形・牙ナシ形・不明の六類に分けた。

上下牙出形は、十四作例あり、すべて荒鬼面である。荒鬼面のセットが、この形状を有する寺院は、胎蔵寺(A)、長安寺(B)、天念寺(C)であり、すべて西満山の寺院である。

上牙出形は、十作例あり、すべて荒鬼面である。  
下牙出形は、九作例あり、すべて荒鬼面である。

牙ナシ形は、三三作例であり、このうち、荒鬼面が七作例、鈴鬼面が二六作例である。荒鬼面のうち、長安寺の荒鬼古面(B-3)の一作例のみが、西満山での牙ナシ形である。

### (6) 墨 銘

今回調査した七〇面のうち、墨銘を有しているのは二八面である。大別すれば、作者銘を書いたもの、年代銘を書いたもの、発願主や発起人などを書いたものの三つに分けられる。

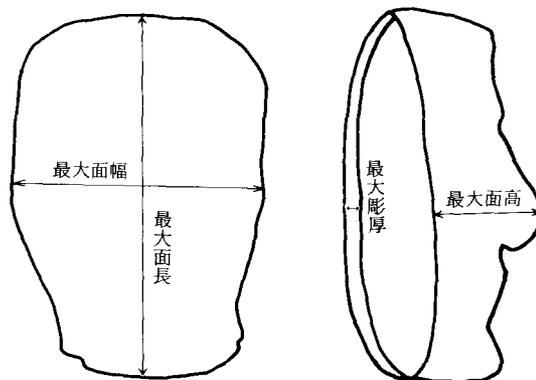
作者銘を記銘している面は十七面あり、長安寺の災払鬼面(B-1)、荒鬼面(B-2)、鈴鬼男面(B-4)、鈴鬼女面(B-5)の「法橋板井春哉」と、弥勒寺の災払鬼面(F-1)、荒鬼面(F-2)、両子

寺の荒鬼面(M-5)の「板井国光」あるいは「法橋国光」の七面に『板井』という苗字をみる。この板井家は、代々石工の系統のようであり、国東半島の石像や、仏像などにも、板井の作者銘を有するものがあり、国東半島の仮面制作に一つの示唆を与えるものと思われるが今回は詳しく調査できなかった。その他、作者銘に姓名をもつのは、応曆寺の災払鬼面(E-1)の「藤原朝臣土谷多左衛門貢久」であり、千灯寺の鈴鬼男面(G-3)、鈴鬼女面(G-4)の「宗明」、両子寺の荒鬼面(M-2)の「盛重」、鈴鬼男面(M-7)の「隆円」、瑠璃光寺の荒鬼面(N-3)の「順清」の五面は名前だけの記銘である。あとの四面は、天念寺の荒鬼面(C-1, 2)と鈴鬼面(C-3, 4)であり、昭和三〇年の制作で「彫刻者・山口完治郎」の記銘がある。天念寺総代の話では、山口完治郎氏は京都の仏師であるという。年代銘を記銘している面は十八面あり、年代の最も古いものは、千灯寺の災払鬼面(G-1)、荒鬼面(G-2)、鈴鬼女面(G-4)の「慶長十五年(一六一〇)」の銘であり、最も新しいものは、弥勒寺の災払鬼面(F-1)、両子寺の荒鬼面(M-5)の「天保二年(一八三一)」の銘であり(天念寺の昭和三十年銘は除く)、いずれも江戸期の銘をもつものばかりである。

発願主、発起人のはっきりしている銘をもつ面は十面であり、胎蔵寺の災払鬼面(A-1)の「山香町野原仁之世喜左衛門」、長安寺の災払鬼面(B-1)の「寺田大十・本田三之丞」、荒鬼面(B-2)の「発起人寺田大十・願主藤本徳次郎」、鈴鬼男面(B-4)の「発起人寺田大十」、鈴鬼女面(B-5)の「発起人寺田大十」、天念寺の荒鬼面(C-1, 2)、鈴鬼面(C-3, 4)の「寄進者土谷国雄、同ヤヨイ、発起人明石明男、井ノ口勝二郎、世話人佐藤清高、猪ノ口勝馬」、瑠璃光寺の鈴鬼男面(N-6)の「又三郎他慈門院」、鈴鬼女面(N-7)の「矢野久太郎他慈門院」、千灯寺の災払鬼面(G-1)の「大願主下坊坊」、鈴鬼男面(G-3)の「大願主下坊坊心盛」などがある。

(7) 測定値

鬼会面の測定値は、最大面長・最大面幅・最大面高・最大彫厚・重量の五類に分け、測定した(単位は、センチ・キログラム)。測定名称は、筆者が試みとして仮に名づけたもので、別に定型ではない。又測定方法は、挿図2の要領で行なった。



挿図2 鬼会面の測定図

それによると、最大面長は、荒鬼面の平均が二五・六五cmであり、個別的にみると、胎蔵寺の災払鬼面(A-1)の四〇・五cmが一番長く、角の長さの三二cmを加えると、実に七二・五cmの面長をもつ大面となる。又、一番短かい面は、行入寺の鎮鬼古面(L-6)の十六・五cmであり、胎蔵寺の災払鬼面の約半分である。

鈴鬼面の平均は二〇・五三cmであり、個別的にみると、長安寺の鈴鬼男面(B-4)が二三・五cmと一番長く、神宮寺の鈴鬼女面(K-5)の十七・三cmが一番短い。

最大面幅は、荒鬼面の平均が二二・八六cmであり、個別的にみると、瑠璃光寺の荒鬼面(N-2)の三二・五cmが一番面幅が大きく、行入寺の鎮鬼古面(L-6)の十三・七cmが一番小さい。

鈴鬼面は、平均が十四・三〇cmであり、個別的では、天念寺の鈴鬼女面(C-4)の十七・四cmが一番大きく、弥勒寺の鈴鬼男面(F-3)の十一・一cmが一番小さい。

最大面高は、荒鬼面の平均が十四・一四cmであり、個別的には、胎藏寺の荒鬼面(A-2)の二〇・五cmが一番高く、行入寺の荒鬼古面(L-5)の八・一cmが一番低く、最高と最低の間かなりの差を生じている。

鈴鬼面は、平均が八・〇四cmであり、個別的には、長安寺の鈴鬼男面(B-4)の十・二cmが一番高く、弥勒寺の鈴鬼女面(F-4)の四・六cmが一番低い。荒鬼面と同様に、鈴鬼面も面高においては、最高と最低の間かなりの差が生じている。

最大彫厚は、荒鬼面の平均が二・二cmであり、個別的には、一番彫りの厚い面は行入寺の鎮鬼面(L-3)の三・七cmで、一番薄いのは応曆寺の荒鬼面(E-2)、行入寺の荒鬼古面(L-5)の〇・五cmである。

鈴鬼面の平均は、一・三五cmであり、個別的には、一番厚いのは成仏寺の鈴鬼女面(J-5)であり、一番薄いのは弥勒寺の鈴鬼女面(F-4)、両子寺の鈴鬼女面(M-8)の〇・五cmである。

彫厚に関しては、荒鬼面・鈴鬼面ともに、あまり差がない。

重量は、荒鬼面の平均が一・三〇kgであり、個別的には、胎藏寺の荒鬼面(A-2)の三・二kgが一番重く、行入寺の災払古面(L-4)の〇・二kgが一番軽い。この軽重は、荒鬼面の場合、かなり大きな差

が生じている。

鈴鬼面は、平均が〇・三一kgであり、個別的には、長安寺の鈴鬼男面(B-4)、成仏寺の鈴鬼男面(J-4)、女面(J-5)、瑠璃光寺の鈴鬼男面(N-6)、女面(N-7)の五面が〇・五kgで一番重く、応曆寺の鈴鬼女面(E-4)、弥勒寺の鈴鬼女面(F-4)の二面が〇・一kgで一番軽い。

鈴鬼面の場合、重量の差はあまり生じていない。

## むすび

以上、国東半島に散在する仮面のうちから「鬼会面」の形態による分類を中心に考察を試みたが、仮面に関する研究は、京都・奈良の伎楽面、舞楽面、あるいは能面などに、わずかに見られるだけであり、地方の仮面については、全く未開の分野である。こうした意味では、序文で述べたように、国東半島の仮面の研究は、まだ端緒にすぎないばかりである。

本稿をその始めとして、今後更に深く様々な局面から、これらの国東半島の仮面の研究をすすめて行くつもりである。ここでは、今回の調査で到達した幾つかの問題点を指摘しておく。

まず、鬼会面のうちの荒鬼面の、災払鬼面・荒鬼面・鎮鬼面は固有の定型をもたないようである。例えば、牙部をとりあげると、胎藏寺・長安寺・天念寺の所蔵する荒鬼面(A-1・2、B-11・2、C-11・2)は、ともに上下牙出形であり、無動寺の災払鬼面(D-1)は上牙出形、弥勒寺の災払鬼面(F-1)は下牙出形、成仏寺・岩戸寺の災払鬼面(I-1、J-1)は牙ナシ形など、機械的に分類することができない。他の各部も、ほぼ同様の結果であり、荒鬼面に関しては、各寺院がよぶ呼称に頼らざるを得ないようである。しかし、荒鬼面を三面あるいは二面に分けずに総合して考えれば、相似する幾つかの型

があり、これを分けて考察する必要があると思われる。

又、荒鬼面、鈴鬼面は、今回は一諸にして分類してみたが、この二面は、形態・使用方法など全く異なるので、二つに分けて考察するのがよいかと思われる。

更に、本稿では触れ得なかつたが、鬼会面は、荒鬼面・鈴鬼面ともに彩色されており、地域により彩色の方法が異なるので、この彩色についても考察する必要があると思われる。

## 註

\*本稿は、別府大学付属博物館の昭和五十四年度研究活動「国東半島の仮面」研究分担者として分担した分野に関する中間報告的な私見である。

(1) 六郷とは、国東郡の六つの郷、来繩(くなわ)、田染(たしぶ)、安岐、武蔵、国東、伊美の各郷を指すもので、この六郷の中に分布された寺院個々を六郷山と称し、それらの寺院を総称して六郷満山と呼ぶ。

(2) 大分県教育委員会「国東半島の修正鬼会」(昭和五十二年刊)を参考にした。

(3) 大嶽順公「国東文化と石仏」(木耳社、昭和四十五年刊) 64頁

(4) 今回の調査での筆者の聞き書きによると、胎藏寺は明治三十二年頃、弥勒寺は大正年間、瑠璃光寺は昭和五年頃、長安寺は昭和十年前後頃、千灯寺は昭和十年頃、無動寺は昭和二十年頃、行入寺は昭和二十六年頃まで鬼会行事を行っていたとの事である。又、文殊仙寺は中止してから百年以上になるとの事である。

(5) 三寺ともに、昭和五十二年に、国の重要無形民俗文化財に指定された。

(6) 成仏寺の場合、役付は、トシノカンジョウ(一名)(行事の檀家側の総責任者)、給仕人(二名)(盃の儀の時に僧侶やテイイレシに給仕する役)、囃子方(三名)(笛・太鼓・鉦を行事の最中に奏樂する)、テイイレシ(八名)(大松明を献納し、それを担ぐ若い衆)となっている。

(7) 大松明は、行事を行なう寺院の坊数だけ準備することになっている。成仏寺の場合は四本である。

(8) 豊後高田市編集委員会「豊後高田市明治百年」(昭和四十三年) 312頁

(9) 名著刊行会「日本寺社大観(寺院篇)」(昭和四十五年) 864頁

(10) 前註⑧の705頁

(11) 真玉町誌刊行会「真玉町誌」(昭和五十三年) 387頁

(12) 前註⑩の388頁

(13) 前註⑩の395頁

(14) 全日本仏教寺院刊行会「全国寺院名鑑」(昭和五十年) 223頁

(15) 前註⑭の223頁

(16) 国東町史刊行会「国東町史」(昭和四十八年) 245頁

(17) 前註⑯の250頁

(18) 前註⑯の253頁

(19) 前註⑯の254頁

(20) 安岐町史刊行会「安岐町史」(昭和四十二年) 953頁

(21) 前註⑳の952頁

(22) 筆者が、試みとして仮に分類したもので定型ではない。以下、耳部、角部、口部、牙部も同様である。

眼の割り貫きの形によって分類したので、例えば、眼の形は丸形になっていても、割り貫いてない場合は丸形に仕上がった。

(23) この面は、本来は瑠璃光寺の鬼会面ではないようである。住職からの聞き書きでは、地蔵院所有の面であったと云われるが、詳細は不明である。

(24) 紐結形は、耳に二つの穴をあけ、面に紐で結びつけ簡単に取り外しの出来るものを指す。貼付形は、木釘で固定するか、現在は、紐で結んでいるが木釘の打ち込み跡の分かるものを指す。不明は、破損がひどく判別出来ない面である。

(25) 不明は、頭部に角のさしこみ跡があるが、角を紛失した面である。

(26) 不明は、破損がひどく下顎部を紛失して阿形・吽形の判別の出来ない面である。

(27) 不明は、破損がひどく下顎部を紛失した面と、口のまわりが虫食いのため牙の判別の出来ない面である。

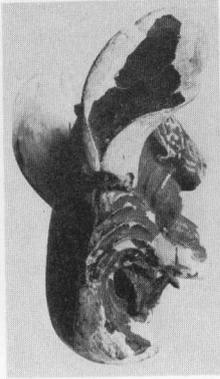
表二 形態による分類と銘、測定値表

	形態による分類					墨 銘			測 定 値				
	(眼部) 杏丸そ 仁の 形形他	(耳部) 紐貼影ナ 結込込 形形形シ	(角部) 不 本本又ナ 角角角シ	(口部) 阿 咩不 形形形明	(牙部) 上 下 牙 不 下 牙 牙 ナ 牙 出 出 出 明	作 者	年 代	そ の 他	最 大 面 長	最 大 面 幅	最 大 面 高	最 大 彫 厚	重 量
A-1	○	○			○		享保7(1723)	○	40.5	29.5	18.5	2.8	2.9
2	○	○			○				38	29.5	20.5	2.5	3.2
3	○	○			○				22	16.5	8.7	2	0.3
4	○	○			○				22.5	16.5	8.5	2.5	0.2
B-1	○	○			○	板井春哉		○	30.5	23	18	3	1.9
2	○	○			○	板井春哉		○	31	22	17.8	2.6	1.7
3	○	○			○				30.3	21.6	14.3	2.3	0.9
4	○	○			○	板井春哉		○	23.5	16.5	10.2	1.6	0.5
5	○	○			○	板井春哉		○	22	15.5	9.3	1	0.4
C-1	○	○			○	山口完治郎	昭和30(1955)	○	29.6	23.7	17.2	3	1.2
2	○	○			○	山口完次郎	昭和30(1955)	○	29.5	22.8	16.7	2.5	1.2
3	○	○			○	山口完治郎	昭和30(1955)	○	22.7	15.5	10	1	0.4
4	○	○			○	山口完治郎	昭和30(1955)	○	22.5	17.4	9.5	1.5	0.4
D-1	○	○			○				37	28.2	16.8	1.9	1.9
2	○	○			○				36.8	27	17	2.4	1.9
3	○	○			○				29	21	13.5	3	1.2
E-1	○	○			○	土谷貢久	延宝7(1679)		23.6	21.5	18.4	1	0.5
2	○	○			○				29.5	21.6	14.7	0.9	0.7
3	○	○			○				19.7	12.8	7.2	0.7	0.2
4	○	○			○				18.1	12.5	6.5	0.9	0.1
F-1	○	○			○	法橋国光	天保2(1831)		29.0	20.6	14.5	1.7	1.3
2	○	○			○	板井国光	文化11(1814)		31.5	21	15.3	1.6	1.2
3	○	○			○				19.5	11	5.6	0.9	0.2
4	○	○			○				19	11.1	4.6	0.5	0.1
G-1	○	○			○				31.5	23	12	1.1	1.1
2	○	○			○				29.4	21	11.5	1.5	1.0
3	○	○			○	宗 明			18.1	14	6	0.6	0.3
4	○	○			○	宗 明	慶長15(1610)	○	19	13.5	6.7	0.9	0.3
H-1	○	○			○				31.5	25	15	2.2	1.6
2	○	○			○				32.7	24.3	12.6	3	1.9
3	○	○			○				20	14.2	8.8	41.4	0.4
4	○	○			○				20.5	14.3	8	1.5	0.4
I-1	○	○			○				32.5	21	15.5	2.7	1.2
2	○	○			○				32	25	15.1	3	1.8
3	○	○			○				33.5	26.4	15.3	3.2	2.0
4	○	○			○				19.5	14	8.8	1.2	0.3
5	○	○			○				19.5	14	8.3	2.3	0.3
J-1	○	○			○				25	19.5	9.3	3.2	1.1
2	○	○			○				29	19.5	13	3	1.1
3	○	○			○				30.7	26.7	17.4	2.3	1.0
4	○	○			○				22	14.5	8.5	2	0.5
5	○	○			○				22	14	8.5	3	0.5
K-1	○	○			○				29.2	23.1	13.3	2	1.7
2	○	○			○				27.6	23.0	17.1	3	1.9
3	○	○			○				27	23	14.8	2.8	1.7
4	○	○			○				18.4	14	8.2	1.9	0.2
5	○	○			○				17.3	13.4	7.4	2.4	0.3
L-1	○	○			○				28.7	22.5	11.1	2.7	1.4
2	○	○			○				31.2	23	14.2	2.6	1.2
3	○	○			○				30	23.5	12.8	3.7	1.2
4	○	○			○				22.1	18	8.7	2.2	0.2
5	○	○			○				19.3	14.6	8.1	0.9	0.3
6	○	○			○				18.5	13.7	9.8	1.5	0.3
7	○	○			○				21.3	14.8	7.9	1.8	0.2
8	○	○			○				21.1	14.8	8	1.5	0.2
M-1	○	○			○	盛 重	元禄8(1695)	○	27.8	25.5	11.5	2	1.1
2	○	○			○				30.3	21.2	12.6	2	1.3
3	○	○			○				33.2	23.5	13.9	2	1.3
4	○	○			○				21.5	18	10.5	2	0.4
5	○	○			○	法橋国光	天保2(1831)		27.3	25	13.6	1.5	1.0
6	○	○			○				22.2	16.5	10.5	2.5	0.5
7	○	○			○	隆 圓	明和7(1770)	○	19.3	13.7	8.3	0.6	0.2
8	○	○			○				20.4	14.1	7.8	0.5	0.2
N-1	○	○			○				29	24.5	14.5	2	1.1
2	○	○			○				34.7	32.5	19.2	3	2.4
3	○	○			○				30.3	29.7	14.7	1	1.1
4	○	○			○	順 清	元禄8(1695)	○	28.8	21	12.9	2.5	1.0
5	○	○			○				26.5	20	8.5	2	0.6
6	○	○			○				22	14.5	9	1	0.5
7	○	○			○				元禄8(1695)				
									元禄8(1695)				

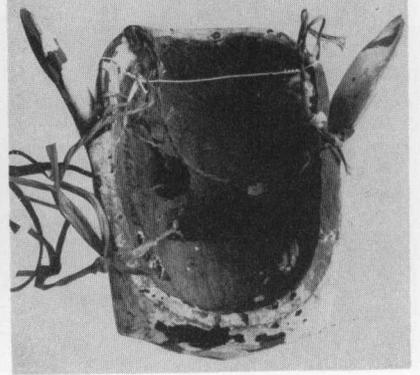
图1 長安寺 災払鬼面 (B-1)



(a) 正面



(b) 側面



(c) 背面

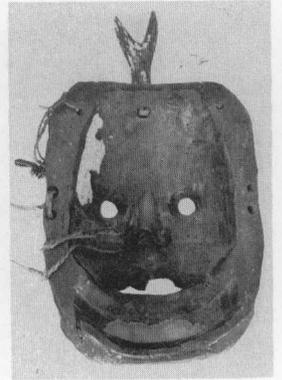
图2 無動寺 荒鬼古面 (D-3)



(a) 正面



(b) 側面

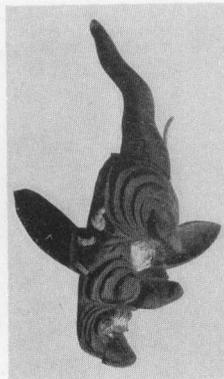


(c) 背面

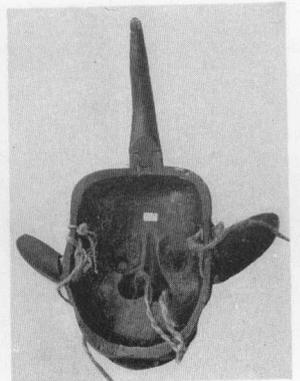
图3 千灯寺 荒鬼面 (G-2)



(a) 正面

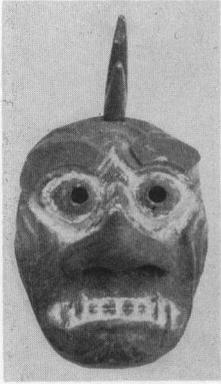


(b) 側面



(c) 背面

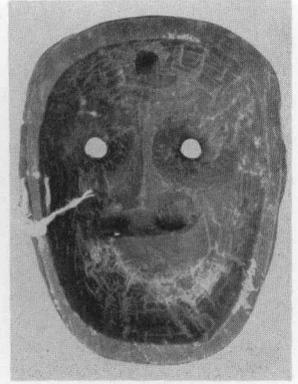
图4 文珠仙寺 荒鬼面 (I-2)



(a) 正面



(b) 侧面



(c) 背面

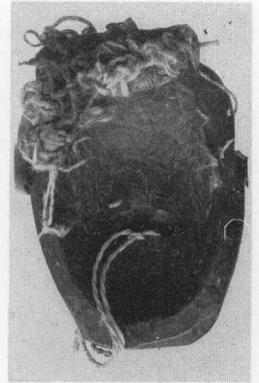
图5 岩戸寺 鎮鬼面 (H-2)



(a) 正面



(b) 侧面



(c) 背面

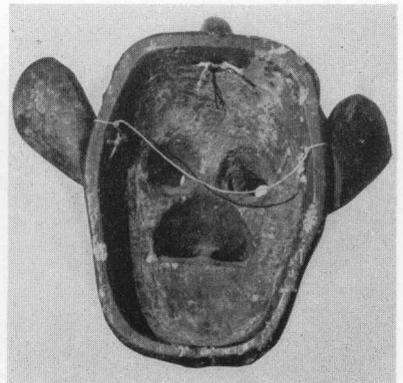
图6 両子寺 荒鬼面 (M-3)



(a) 正面



(b) 侧面



(c) 背面

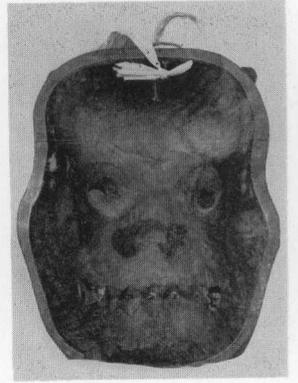
图7 両子寺 荒鬼面 (M-5)



(a) 正面



(b) 側面



(c) 背面

图8 長安寺 鈴鬼男面 (B-4)



(a) 正面



(b) 側面



(c) 背面

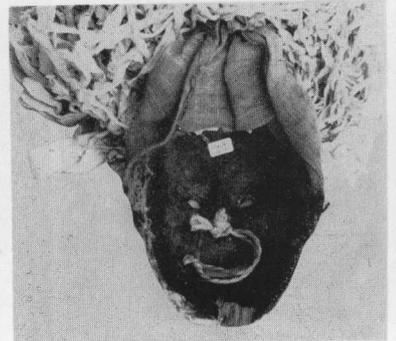
图9 千灯寺 鈴鬼男面 (G-3)



(a) 正面



(b) 側面



(c) 背面

图10 岩戸寺 鈴鬼男面 (H-3)



(a) 正面

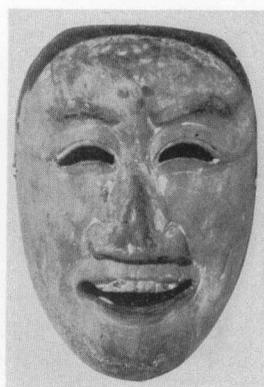


(b) 側面



(c) 背面

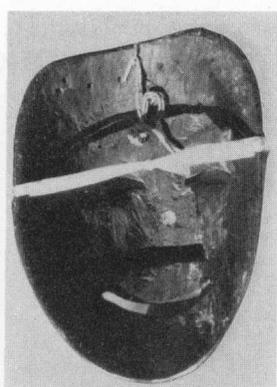
图11 両子寺 鈴鬼女面 (M-8)



(a) 正面

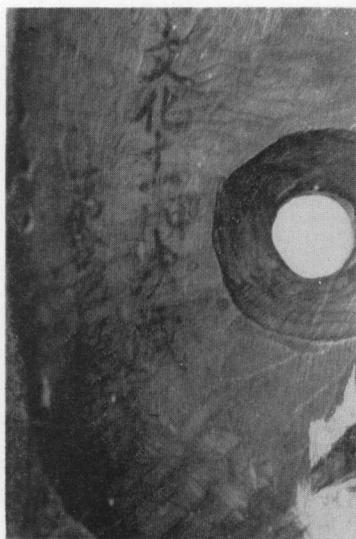


(b) 側面

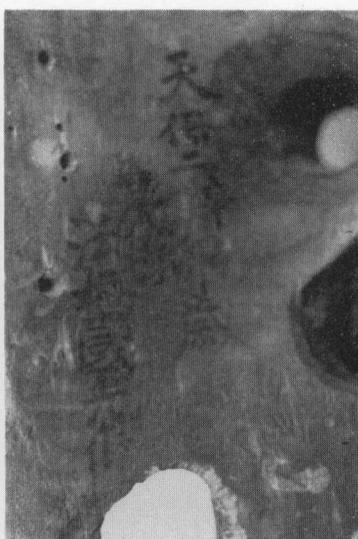


(c) 背面

图12 黒 銘



(a) 弥勤寺 荒鬼面 (F-2)



(b) 両子寺 荒鬼面 (M-5)



(c) 瑠璃光寺 鈴鬼女面 (N-7)